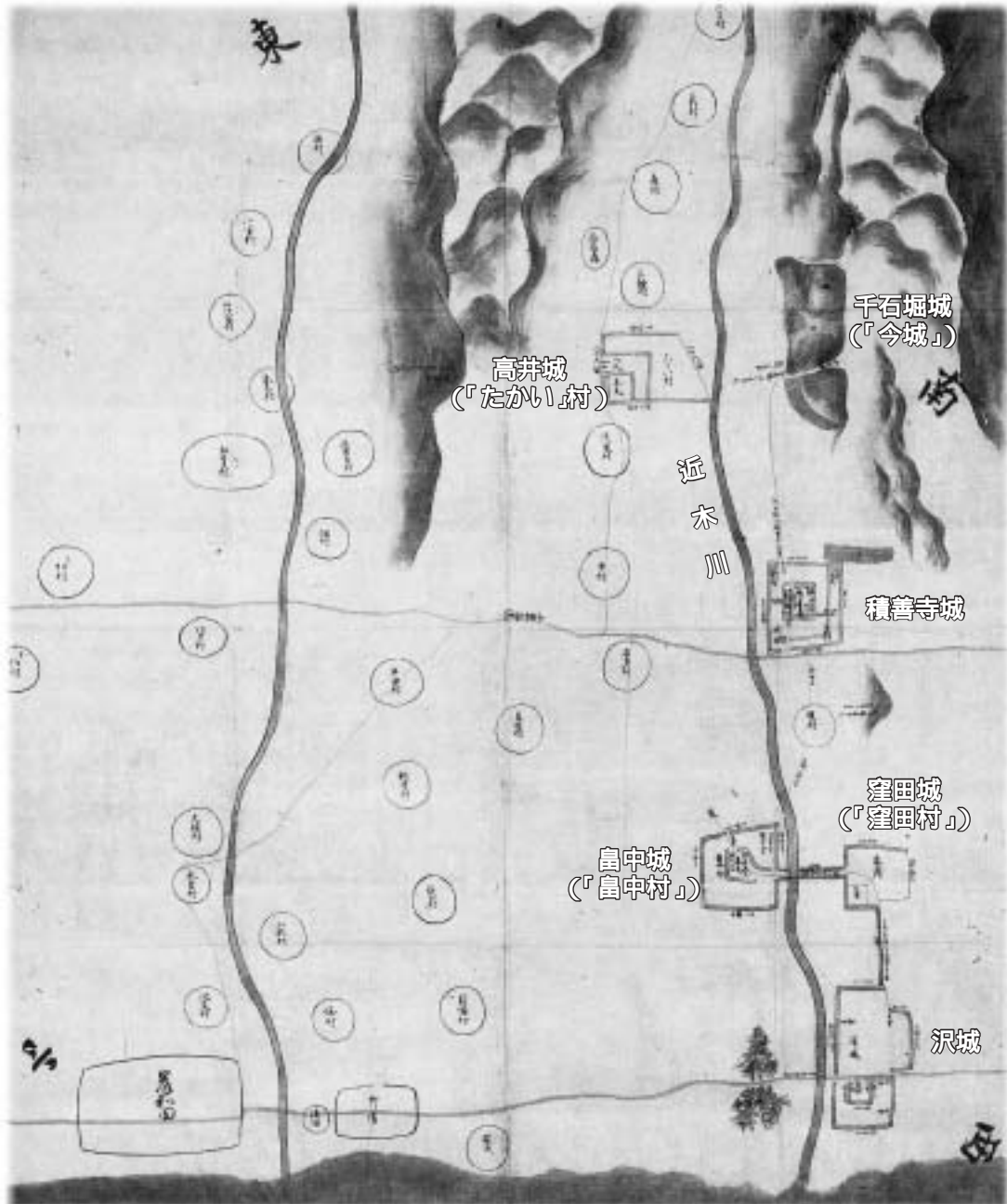


TEMPUS テンプレス



2004年(平成16年)

18号



もくじ

秀吉の紀州攻めと積善寺城跡

廣海家主屋の瓦調査

歴史を探ろう！木島谷地域

願泉寺の所在地名のうつりかわり

市内の古文書調査から

願泉寺所蔵の市指定文化財の絵画から

秀吉の紀州攻めと積善寺城跡

秀吉の紀州侵攻の経緯

本能寺の変（1582年）により織田信長亡き後、天下統一をめざし、羽柴秀吉が台頭してきます。天正12（1584）年、織田信雄は徳川家康を後ろ盾として、秀吉と小牧・長久手（愛知県）において対峙します。このような緊迫した情勢のなか、泉州では根来衆・雑賀衆が勢力を広げていました。泉州・紀州には根来衆の寺院と地主層が強く結びつき強力な勢力をもっており、その権益をめぐり秀吉と対立します。

天正13（1585）年、秀吉は紀州攻めの命を下します。同年3月20日に先陣が大坂を出発、21日には秀吉本隊も出発、総勢十数万にも及ぶ大軍でした。21日には早くも貝塚で戦闘が開始されます。

一方、根来衆・雑賀衆は、貝塚市域に所在する高井城（名越）、千石堀城、積善寺城（橋本）、畠中城（畠中）、沢城（沢）に立て籠もり、秀吉軍の紀州侵攻を食い止めようとしていました。これらの城は、いずれも貝塚市域の熊野街道、紀州街道、水間街道などの要衝に位置しています。（表紙絵図参照）

積善寺城

貝塚市橋本に所在する積善寺城は、根来衆が、永禄元（1558）年に三好氏との抗争の際、築いた城であり、秀吉軍との戦いに備え、防御施設をより強固にしたものと考えられます。『春生随筆』によれば、城の規模は、東面78間（約141m）、二重濠、西面93間（約169m）、三重濠、南面120間（約218m）、三重濠、北面132間（約240m）、三重濠で、外に大川（近木川）、35間（約63m）四方の本丸に濠をめぐらし、本丸および東西南北に櫓を構えていたといひます。

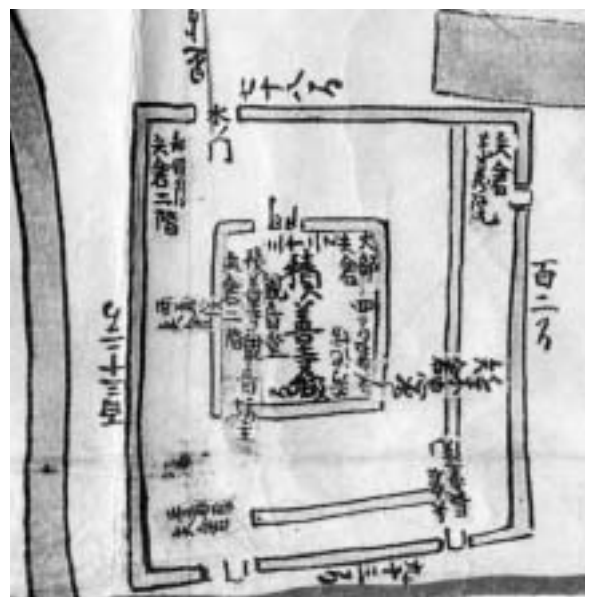
おそらく城域は、現在の貝塚中央病院から近木川を挟んだ対岸の貝塚市橋本一帯で、安楽寺付近が本丸と推定されています。

『春生随筆』(しゅんせいずいひつ)

『春生随筆』は、卜半家第11代了諦（1846～1877在職）によって記された全30巻（現在第一、二巻を亡失）からなる記録で、内容的にはさまざまな書物や古文書の内容を筆写したものです。第十四巻に「和泉国日根郡近木庄橋本村積善寺城」と題する積善寺城に関する記載があり、城の規模やそこに籠もっていた根来衆の名前などの記述が見えます。



積善寺城跡位置図（1 / 20,000）



「根来出城配置図」（積善寺城部分を抜粋）

籠城戦

秀吉軍は、地蔵堂丸山古墳に本陣を敷き、一斉に根来衆・雑賀衆が立て籠もる城に対し攻撃を開始し、積善寺城へは長岡兵部大輔（細川藤孝）父子、蒲生忠三郎（蒲生氏郷）を主力とする軍を差し向けます。

積善寺城には、出原右京を大将とする総勢約9,500名が立て籠もっていましたが、激しい戦闘の末、千石堀城をはじめとする城が次々に陥落するなか、3月22日、積善寺城は和議によって開城、降伏しました。

秀吉軍は紀州に進出し、3月23日には、根来寺（和歌山県岩出町）を焼き討ちにし、4月22日に雑賀衆の本拠地である太田城（和歌山市）を水攻めにより落城させ、これにより紀州を平定します。

積善寺城跡の調査

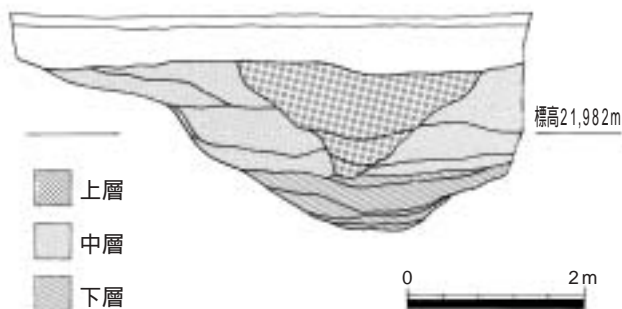
最近の積善寺城跡の調査としては、平成15年度に2回、平成16年度に1回、実施しました。

平成15年度の調査は、個人住宅の建設に伴い、8.6㎡と14㎡の2箇所の調査区を設定し、積善寺城の濠と考えられる遺構を発見しました。濠は東西方向に掘られており、その規模は幅6m以上、深さ1.8mです。濠はU字（断面形状）に掘り込まれており、石垣などは備えていませんでした。濠の埋土は3層に大別できます。下層では断続的な水の流れたことが認められ、防御機能のほかに排水路としても利用されていた可能性があります。中層は人為的に埋められた層であり、埋め立て作業が短期間に行なわれたと考えられます。上層は、埋め立て後に新たに掘削した溝です。この溝は大量の瓦や大きな礫によって埋められていました。平成15年度の調査で発見した濠は、おそらく城の南面に設けられた濠と考えられます。濠の下層からは数点の平瓦が出土していますが、調査では籠城戦などに関連のある遺物は出土しませんでした。

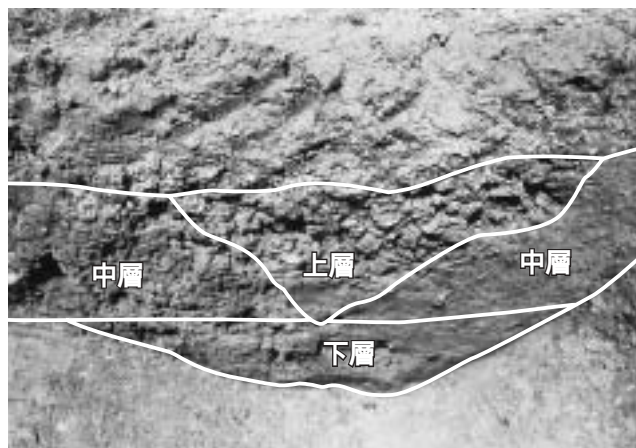
平成16年度の調査は、平成15年度の調査区より東へ約100mの地点で8㎡の調査区を設定して調査を行いました。この調査では、江戸時代後半以降の生活排水溝や整地層を検出しましたが、積善寺城に関連する遺構は確認することはできませんでした。その理由として、積善寺城当時の地層が後世の開発により削り取られている可能性があげられます。

積善寺城は、南下する秀吉軍を阻む、根来衆・雑賀衆の最前線の城として築かれました。しかし、秀吉軍の圧倒的な兵力の前に降伏を余儀なくされ、落城後は、役目を終えた防御施設は取り潰されたと考えられ、このときに濠も埋め立てられたものと推測されます。埋め立て後には、新たに溝が設けられ、生活排水路として利用されたものと考えられます。

今後も発掘調査により、城の具体像を明らかにしていきたいと考えています。



濠の断面図



濠の断面写真

ひろ み け 廣海家主屋の瓦調査!

廣海家は西町に所在し、幕末から明治にかけて廻船問屋(かいせんどんや)を営んでいました。その歴史は、天保6(1835)年に貝塚寺内の有力町人である明瀬家(みょうせけ)の娘ひろが摂津国鳴尾(現在の兵庫県西宮市)の酒造家辰馬家(たつうまけ)から養子を迎え、廣海姓を名乗って分家したことからはじまります。慶応年間(今から約135~140年前)には4隻の大型船を持ち、北陸や東北、北海道などを廻り、米や肥料を仕入れて近辺の農家に売っていました。

建物は安政5(1858)年に焼失し、現在の建物は文久元(1861)年に建てられたものです。平成15年には主屋と離れ、蔵、納屋、高塀などが国の登録文化財になりました(テンブス14号参照)。

このたび、主屋北西側の屋根瓦の葺き替え修理をすることになり、修理工事にともなって瓦の調査を行いました。



廣海家屋根瓦葺き替え工事風景

調査は、取り除いた古い屋根瓦の文様や製作年代を示す痕跡、刻印(製作した人の名前を捺したもの)を調べたあと、写真などの記録をとりました。

刻印には「谷川庄次郎」「泉州/谷川七兵衛」「泉州/瓦師七兵衛」「泉州貝塚/瓦師七兵衛」「貝瓦治」「岸瓦(姪)」などがあります。

このうち、当時廣海家の主屋建設にともない中心的に瓦の製作にあたったのは「谷川庄次郎」と思われます。「谷川庄次郎」銘の屋根瓦は圧倒的に多く、軒を飾った軒丸瓦や軒平瓦、棟瓦、棟の端を飾る鬼瓦など、



軒平瓦



軒丸瓦



軒丸瓦刻印

屋根の最も目立つ部分に「谷川庄次郎」作の瓦が使用されています。次に「泉州／谷川七兵衛」作の瓦が多く使用されています。これらの瓦工人はその名前が示すように、谷川村（現在の泉南郡岬町多奈川、谷川付近）で瓦を製作していた人物だと考えられます。

また、刻印のない瓦のなかにはその数や葺いていた位置などによって、「谷川」銘刻印瓦とともに文久元（1861）年建設の際に製作されたと考えられる瓦があります。

「泉州／瓦師七兵衛」「泉州貝塚／瓦師七兵衛」「貝瓦治」「岸瓦（劔）」などの刻印がある瓦はそれぞれ1枚ずつしか見つかっておらず、これらは安政5（1858）年に焼失した建物の瓦を再利用した可能性があります。

これらのことから、文久元（1861）年に廣海家を建設するに際し、瓦製作を岬町谷川の「谷川庄次郎」へ依頼し、「谷川庄次郎」から「谷川七兵衛」などの工人へ製作が下請けされたと考えられます。廣海家建設に関わった工人は、刻印のほか、製作時に軒丸瓦や軒平瓦の文様をつけるための范型（はながた）の違いなどによって4名以上いたと考えられます。

一つの建物に複数名の瓦工人がたずさわることは、大きな寺院の場合ではありますが、商家では例がありません。このことは廣海家の建設工事が寺院に匹敵するような大規模なものであったことを証明していると思われる。

丸瓦刻印



「谷川庄次郎」



「泉州／谷川七兵衛」



「泉州貝塚／瓦師七兵衛」



「貝瓦治」

歴史を探ろう！木島谷地域

貝塚市内にはたくさんのお寺や名所旧跡があります。とくに今日でも多くの参拝者が訪れ「水間観音」の愛称で親しまれている水間寺は有名です。この水間寺から近木川中流域に広がる地域が木島谷（きのしまだに）と呼ばれる地域です。

木島谷とは、昭和10（1935）年に貝塚町（現在の貝塚市）に合併した旧木島（きしま）村の地域にあたります。現在の町名でいうと、清児（せちご）・名越（なごせ）・水間（みずま）・三ツ松（みつまつ）・森にあたります。この地域には、現在でもたくさんの文化財が残されており、教育委員会での調査が進んでいます。今回は、この木島谷地域の歴史をひも解いていきたいと思います。

木島谷は古くは木島郷あるいは木島庄と呼ばれていました。平安時代に作られた『和名類從抄（わみょうるいじゅうしょう）』という書物によると、和泉郡十郷の一つとして、木島郷の名前が見られます。その範囲は、津田川流域と近木川の上・中流域と海岸部からなり、現在の貝塚市のうち旧木島村・旧麻生郷村に、旧西葛城村の一部であった木積（こつみ）や馬場、三ヶ山（みかやま）といった村々と、現在の岸和田市にある土生（はぶ）・河合におよぶ広大な地域に及んでいました。

鎌倉時代の宝治元（1248）年に「木島新庄」という表現が初めて見られ、庄園が成立したと考えられます。この木島庄の地頭には鎌倉幕府の執権北条氏の一門がなり、支配していました。鎌倉時代が終わり室町時代へ移るなか、その地頭は今川氏や河内国の教興寺（きょうこうじ）（現在の八尾市にある真言律宗の寺）が任じられました。また、南北朝の争乱とも関わって、南朝方の地頭も存在するなど、その支配は複雑でした。現在、半田の海岸寺山に碑を残す橋本正高を出した橋本氏一族は、南朝方として北朝方と対峙し、土丸城（現在の泉佐野市土丸にあった城）を奪うなどの戦功を上げたことでも有名です。



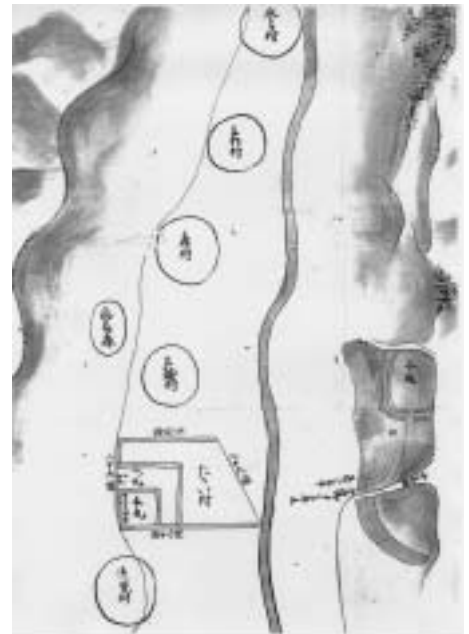
『和泉名所図会』 寛政8（1796）年刊 に描かれている水間寺
天明4（1784）年の火災で焼失し、19世紀初めに再建される本堂や三重塔は建物の基礎しか見られません。

戦国時代の木島谷は、国人（在地の武士たち）たちや根来・雑賀の一揆勢が、実質的に支配していました。こうした勢力に対して、三好長慶や織田信長、羽柴秀吉が攻め込み、紀ノ川流域からこの泉南の一带は幾度も戦場になりました。

特に秀吉の紀州攻めの際、木島谷では根来・雑賀の一揆勢や百姓らが千石堀城（右の図で近木川の右側に描かれている山城）や高井城（右の図で「たかい村」と書かれた場所）に立て籠もりましたが、それぞれ落城したと伝えられます。こうして根来・雑賀の一揆勢の抵抗がおさえられた後、この地域は秀吉の直轄領になりました。その後、天正13（1585）年からは岸和田藩領になりました。江戸時代に入って、清見・名越・水間・三ツ松・森の五つの村々が木島谷地域としてまとめられました。

木島谷の結びつきは、政治的な支配の枠組み（＝木島郷あるいは木島庄）だけではなく、祭祀や水利など共同体としての結びつきが深いと言えます。木島谷の全体の鎮守であった森の稲荷神社は、祭りをはじめとする様々な年中行事のなかで、地域の人びとの集う場となっています。また、現在も農業のさかんな木島谷地域では、古くからの水利を今も広く利用しています。

木島谷地域は古代の文献に登場する古い歴史を持つ地域です。現在でも目を凝らしてみると、地域のおちおちにいにしへの面影が残されています。



「根来出城配置図（木島谷地域を抜粋）」

願泉寺の所在地名のうつりかわり

—願泉寺所蔵の市指定文化財の絵画から—

貝塚寺内の中心寺院である願泉寺には、慶長18（1613）年以前に制作・下付された画像類7組が現存し、内6組の裏書にその前身にあたる御堂の所在地の記載があります。これらの記載から、その所在地名の変化について考えてみましょう。

天文19（1550）年下付の方便法身尊像（ほうべんほっしんそんぞう）に「和泉国南郡麻生郷堀海塚」、文禄2（1593）年下付の顕如上人画像に「泉州南郡麻生郷海塚」、室町時代下付の親鸞聖人画像の慶長12（1607）年追記銘に「泉州南郡麻生郷海塚之坊願泉寺」、慶長12年下付の親鸞聖人絵伝に「泉州南郡麻生郷海塚」、慶長18（1613）年下付の親鸞聖人画像および観如上人画像に「泉州南郡貝塚寺内」とあります。以上から、慶長12年までは一貫して「麻生郷」の「海塚」と記載されますが、慶長18年に「貝塚寺内」に変化していることから、その間に地名の変化があったことがわかります。



この期間には「和泉国貝塚本願寺下ト半寺内」をト半領とする慶長15（1610）年が含まれることから、御堂の所在地名が変化したのは慶長15年である可能性が高いといえます。

貝塚寺内の由緒書には、寺内がもともと中世の海塚村（現在の貝塚市海塚）の一部だったという内容のものがああります。上記の裏書記載から判断すると、慶長15年以前の貝塚寺内は海塚村に属する集落と考えられます。このことから、願泉寺が所在する貝塚寺内は、慶長15年のト半領地化を契機に初めて行政的に独立したものと考えられるのではないのでしょうか。

市内の古文書調査から

教育委員会では、貝塚市に関わる古文書を調査し、歴史をひも解く作業を行っています。ここでは、今年の1月から3月にかけて開催しました特別展「貝塚寺内の武士と町人 願泉寺ト半家の家来衆と貝塚寺内の商家」で展示し、調査を行ったものから、並河(なみかわ)家文書を紹介します。

並河家文書

貝塚寺内の中心寺院である願泉寺に近く、「御坊前通り」に西面する旧家が並河家です。この家に保管されてきた江戸時代の古文書類85点を調査しました。

並河家は、江戸時代には、貝塚寺内の「地頭」(領主)であったト半家の家来として代々ト半役所(貝塚寺内の政庁)の要職を勤めた家柄です。

調査により確認された古文書類には、寛政10(1798)年、ト半家八代了覚(りょうかく)が亡くなった際、その息子了恕(りょうじょ)が相続の挨拶のために江戸へ行きたい旨を、堺奉行所に伺い出たものの写しがあります。また、文化3(1806)年に堺奉行所から困米(かこいまい)(飢饉の年に備えて米を蓄える)を寺内町人に依頼する旨の記録なども見られ、江戸幕府の出先機関であった堺奉行所とのやり取りが、かなり頻繁に見られたことがわかります。これらト半家の家来であったことに由来する史料は、これまでに調査例がなく、幕府と寺内の関係を探る手がかりが見つかっています。



文化3(1806)年の困米(かこいまい)の記録

貝塚市文化財調査報告 第二集「浄土真宗関係の絵画と書跡」を刊行しました。本書では、平成15年度に行った真宗絵画調査資料54件の写真と解説をのせています。平成15年度に市の文化財として指定した願泉寺の本願寺歴代門主画像ほか貝塚市指定文化財についても全点掲載しています。

お求めは社会教育課または郷土資料展示室まで。

一部500円



表紙の絵図「根来出城配置図(安井澄彦氏所蔵)」

室町時代末期に根来寺勢力によって現在の貝塚市域に築造・整備された出城を描いた絵図です。右手近木川沿いに、上手より千石堀城(「今城」)、高井城(「たかい村」)、積善寺城、畠中城(「畠中村」)、窪田城(「窪田村」)、沢城が描かれています。いずれも天正13(1585)年の羽柴(豊臣)秀吉の紀州攻めによって陥落しました。市内の城跡を説明する時には必ず使われる絵図です。

参考・引用文献 貝塚市教育委員会1992『貝塚の歴史と文化』を改変

かいづか文化財だよりテンブス18号

平成16年7月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597 8585 貝塚市畠中1丁目17-1

Tel (0724) 33-7126 Fax (0724) 33-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.osaka.jp

印刷 和歌山印刷所

テンブスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67^円

